

## 解析電磁気学演習 (10) 磁場によって働く力 (June 19)

学籍番号:

氏名:

☞「解の導出過程」もきちんと書いて下さい。

☞ベクトルは  $\mathbf{C}$ ,  $\mathbf{E}$  のように、1本加えて 太く 書いて下さい。太くなっていない場合は×にします。

- 1 図1に示すように、一様磁場  $\mathbf{B} = -B_0\hat{y}$  [T]、及び一様電場  $\mathbf{E} = -E_0\hat{z}$  [V/m] がある空間において、時刻  $t = 0$  s に荷電粒子 (電荷  $q$  [C]、質量  $m$  [kg]) が位置  $\mathbf{r}(0) = \mathbf{0}$  [m]、速度  $\mathbf{v}(0) = v_0\hat{x}$  [m/s] で運動をしている。  $t > 0$  におけるこの粒子の運動を表す  $\mathbf{v}(t)$ ,  $\mathbf{r}(t)$  を求めよ。

荷電粒子に働く力は  $q\mathbf{v} \times \mathbf{B} + q\mathbf{E}$  なので、運動方程式は以下となる。

$$\begin{aligned} m \frac{d\mathbf{v}}{dt} &= q\mathbf{v} \times \mathbf{B} + q\mathbf{E} = q(v_x\hat{x} + v_y\hat{y} + v_z\hat{z}) \times (-B_0\hat{y}) + q(-E_0\hat{z}) \\ &= qB_0(-v_x\hat{z} + v_z\hat{x}) - qE_0\hat{z} \end{aligned}$$

成分ごとに書けば

$$\frac{dv_x}{dt} = \omega_c v_z, \quad \frac{dv_z}{dt} = -\omega_c v_x - \frac{q}{m} E_0$$

となる。ここで、 $\omega = \frac{qB_0}{m}$  [rad/s] である。

この連立微分方程式を解く。 $\frac{d^2 v_z}{dt^2} = -\omega_c \frac{dv_x}{dt} = -\omega_c^2 v_z$  より、 $v_z = A \cos \omega_c t + B \sin \omega_c t$  となる。初期条件  $v_z(0) = 0$  より、 $A = 0$  となる。

また、運動方程式の第二式から  $v_x = -\frac{1}{\omega_c} \frac{dv_z}{dt} - \frac{1}{\omega_c} \frac{q}{m} E_0 = -B \cos \omega_c t - \frac{E_0}{B_0}$  となる。初期条件  $v_x(0) = v_0$  より、 $-B - \frac{E_0}{B_0} = v_0$ 、即ち  $B_0 = -\left(v_0 + \frac{E_0}{B_0}\right)$  である。

$y$  成分については力はかからないので  $v_y = C$ 、初期条件から  $v_y = 0$  と決まる。

結局、

$$v_x = \left(v_0 + \frac{E_0}{B_0}\right) \cos \omega_c t - \frac{E_0}{B_0}, \quad v_y = 0, \quad v_z = -\left(v_0 + \frac{E_0}{B_0}\right) \sin \omega_c t$$

ちなみに、 $\mathbf{r}(t)$  については、 $\mathbf{r} = \int_0^t \mathbf{v}(t') dt' + \mathbf{r}(0)$  から、以下となる。

$$\begin{aligned} x &= \frac{1}{\omega_c} \left(v_0 + \frac{E_0}{B_0}\right) \sin \omega_c t - \frac{E_0}{B_0} t, \\ y &= 0, \\ z &= \frac{1}{\omega_c} \left(v_0 + \frac{E_0}{B_0}\right) (\cos \omega_c t - 1) \end{aligned}$$

補足: 連立微分方程式を解く際に、別の式を時間微分した場合、

$$\frac{d^2 v_x}{dt^2} = \omega_c \left(-\omega_c v_x - \frac{q}{m} E_0\right) = -\omega_c^2 v_x - \omega_c^2 \frac{E_0}{B_0}$$

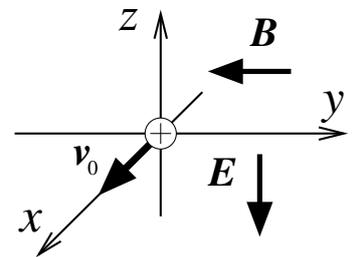


図 1:  $t = 0$  における荷電粒子の位置と速度

$v_x = -\frac{E_0}{B_0}$  は一つの特解である。これに同次方程式の解  $A \cos \omega_c t + B \sin \omega_c t$  を加えた

$$v_x = A \cos \omega_c t + B \sin \omega_c t - \frac{E_0}{B_0}$$

が一般解である。ここから初期条件を適用して求めることも可能である。

- 2 図2に示すように一様磁場  $\mathbf{B} = B_0 \hat{\mathbf{y}}$  [T] に直角三角形 (底辺  $a$  [m]、高さ  $b$  [m]) の導線が置かれており、底辺の中心が原点となっている。この三角形は  $z$  軸回りに回転できるように固定されている。底辺と  $x$  軸のなす角を  $\phi$  [rad] とする。導線中を  $I$  [A] の電流が図の矢印の方向に流れているとき、この三角形電流ループが磁場から受ける力  $\mathbf{F}$  [N]、および力のモーメント  $\mathbf{N}$  [N m] を求めよ。力のモーメントが  $\mathbf{0}$  となる  $\phi$ 、および最大となる  $\phi$  はいくらか。

(i)  $xy$  平面内にある電流部分について、 $\mathbf{r}_1 = -s(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}})$ ,  $-\frac{a}{2} \leq s \leq \frac{a}{2}$  と書ける。線素ベクトルは  $d\mathbf{r}_1 = -ds(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}})$  となる。

電流素片  $I d\mathbf{r}_1$  が受けるアンペール力  $d\mathbf{F}_1$  は

$$d\mathbf{F}_1 = -I ds(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) \times B_0 \hat{\mathbf{y}} = -IB_0 \cos \phi ds \hat{\mathbf{z}}$$

となる。辺全体で受ける力は

$$\mathbf{F} = \int d\mathbf{F} = -IB_0 \cos \phi \hat{\mathbf{z}} \int_{-\frac{a}{2}}^{\frac{a}{2}} ds = -IB_0 a \cos \phi \hat{\mathbf{z}}$$

また、電流素片  $I d\mathbf{r}_1$  にかかる力のモーメント  $d\mathbf{N}_1$  は

$$\begin{aligned} d\mathbf{N}_1 &= -s(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) \times (-IB_0 \cos \phi ds \hat{\mathbf{z}}) \\ &= IB_0 \cos \phi s ds (-\cos \phi \hat{\mathbf{y}} + \sin \phi \hat{\mathbf{x}}) \end{aligned}$$

従って、 $\mathbf{N}_1 = \int d\mathbf{N}_1 = IB_0 \cos \phi (-\cos \phi \hat{\mathbf{y}} + \sin \phi \hat{\mathbf{x}}) \int_{-\frac{a}{2}}^{\frac{a}{2}} s ds = \mathbf{0}$

(ii)  $z$  軸に平行な電流の経路は  $\mathbf{r}_2 = -\frac{a}{2}(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) + z \hat{\mathbf{z}}$ ,  $0 \leq z \leq b$  と表せ、その線素ベクトルは  $d\mathbf{r}_2 = dz \hat{\mathbf{z}}$  となる。

電流素片  $I d\mathbf{r}_2$  に働くアンペール力は  $d\mathbf{F}_2 = I dz \hat{\mathbf{z}} \times B_0 \hat{\mathbf{y}} = -IB_0 dz \hat{\mathbf{x}}$ 、辺全体では  $\mathbf{F}_2 = -IB_0 b \hat{\mathbf{x}}$  となる。

電流素片  $I d\mathbf{r}_2$  に働くアンペール力による力のモーメントは  $\mathbf{N}_2 = -\frac{a}{2}(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) \times (-IB_0 dz \hat{\mathbf{x}}) = -\frac{a}{2} IB_0 dz \sin \phi \hat{\mathbf{z}}$ 、辺全体では  $\mathbf{N}_2 = -\frac{a}{2} IB_0 b \sin \phi \hat{\mathbf{z}}$  となる。

(iii) 斜辺に沿う電流の経路は、始点が  $\mathbf{r}_P = -\frac{a}{2}(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) + b \hat{\mathbf{z}}$ 、終点が  $\mathbf{r}_Q = \frac{a}{2}(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}})$  となるので、 $\mathbf{r}_3 = \mathbf{r}_P + s(\mathbf{r}_Q - \mathbf{r}_P) = -\frac{a}{2}(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) + b \hat{\mathbf{z}} + s a(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) - s b \hat{\mathbf{z}}$  と表せ、線素ベクトルは  $d\mathbf{r}_3 = ds\{a(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) - b \hat{\mathbf{z}}\}$  となる。

電流素片に働くアンペール力は  $d\mathbf{F}_3 = I ds\{a(\cos \phi \hat{\mathbf{x}} + \sin \phi \hat{\mathbf{y}}) - b \hat{\mathbf{z}}\} \times B_0 \hat{\mathbf{y}} = IB_0 ds(a \cos \phi \hat{\mathbf{z}} + b \hat{\mathbf{x}})$ 、辺全体では  $\mathbf{F}_3 = IB_0(a \cos \phi \hat{\mathbf{z}} + b \hat{\mathbf{x}})$  となる。

電流素片に働くアンペール力による力のモーメントは、 $z$  軸から  $\mathbf{r}_3$  へのベクトルは  $\mathbf{r}_3 - (\mathbf{r}_3 \cdot \hat{\mathbf{z}}) \hat{\mathbf{z}}$  と書けるので、 $d\mathbf{N}_3 = \{\mathbf{r}_3 - (\mathbf{r}_3 \cdot \hat{\mathbf{z}}) \hat{\mathbf{z}}\} \times IB_0 ds(a \cos \phi \hat{\mathbf{z}} + b \hat{\mathbf{x}}) = IB_0 a(s - \frac{1}{2}) ds(-a \cos^2 \phi \hat{\mathbf{y}} + a \sin \phi \cos \phi \hat{\mathbf{x}} - b \sin \phi \hat{\mathbf{z}})$  となり、 $\mathbf{N}_3 = \mathbf{0}$  となる。

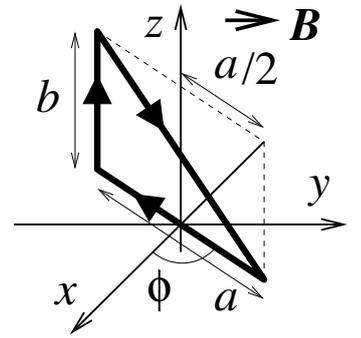


図 2: 一様磁場中の三角形電流ループ

結局、電流ループ全体に働く力と力のモーメントは以下となる。

$$\begin{aligned} \mathbf{F} &= \sum \mathbf{F}_i = \mathbf{0} \\ \mathbf{N} &= \sum \mathbf{N}_i = -\frac{a}{2}IB_0b \sin \phi \hat{z} \end{aligned}$$

力のモーメントは  $\phi = 0, \pi$  で  $\mathbf{N} = \mathbf{0}$  となり、 $\phi = \pm \frac{\pi}{2}$  で最大となる。

力のモーメントは、 $0 < \phi < \pi$  では  $\mathbf{N}$  は  $-z$  方向、 $-\pi < \phi < 0$  では  $\mathbf{N}$  は  $+z$  方向となり、図2の直角三角形の直角の頂点が  $x = -\frac{a}{2}$  に位置する ( $\phi$  が 0 になる) 向きに回転する力のモーメントが働く。従って、 $\phi = \pi$  でも回転はしないが、わずかに角度がずれただけで  $\phi = 0$  とするようになる、不安定な状態である。